

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32513

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820013

研究課題名(和文)「コロニアリズム」と「ナチズム」のあいだ

研究課題名(英文)Between Colonialism and National Socialism

研究代表者

磯部 裕幸 (Isobe, Hiroyuki)

秀明大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：10637317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、ドイツ植民地統治の歴史が、その後どのような影響を与えたのかについて、実際植民地を経験した人物の経歴を例に挙げながら考察することを目標としている。具体的には、植民地における形質人類学、熱帯医学研究に従事した生物学者や医学者が、その経歴を生かしワイマール期・ナチ期にどのような研究を行なったのかを考える。以上のような目的を達成するため、ベルリンの連邦文書館および国立図書館などで史料調査および収集を行なった。その結果、一部を除いて必要な史料を閲覧・複写することができた。今後は、交付期間中に十分にできなかった研究成果の発表(論文執筆や研究会・学会での発表)を積極的に行なっていきたい。

研究成果の概要(英文)：In this research project is to assess how the German colonial history affected the post-colonial society of the German Empire. Specifically, the career of those anthropologists and physicians should be shown who began their research activities in the overseas colonies in their younger years and took up a leading position in the academic guild on ground of their colonial experience in Weimar and Nazi era. For this research purpose, numerous historical documents, including especially the colonial documents prepared by the above-mentioned scientists and their scientific works, were collected and analyzed at the Bundesarchiv or the Staatsbibliothek in Berlin. Now the research results should be made known, which could not be fully put into practice during the research period. This includes above all, to publish a research monograph or to make a presentation at scientific conferences.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・ヨーロッパ史・アメリカ史

キーワード：戦前ドイツ 植民地 ナチズム 医学 形質人類学 人種主義 植民地修正主義 国際比較

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の代表者は、東京大学大学院総合文化研究科に提出した修士論文において、ドイツ領南西アフリカ植民地に住む「混血」住民の形質人類学的調査を行なったオイゲン・フィッシャー(1874-1967)を取り上げ、客観性を標榜する人類学的な「学知」がいかに容易に植民地支配を正当化する人種主義言説と結びついてしまうかについて分析を行なった。またその後ドイツ・コンスタンツ大学に提出した博士論文においては、ドイツの「熱帯医療」の研究成果が植民地医療政策になる(或いはならない)過程を分析した。修士論文、博士論文を執筆する過程において形質人類学者や医学者たちの経歴を調べてみると、ナチ期に人種衛生学に従事したり、収容所における「人体実験」に関わったりした医師や形質人類学者の中に、帝政期に植民地を経験した者が少なからずいることが判明した。

一般にドイツの植民地統治は、イギリスやフランスのそれに比べてその期間が短く、経済的にも大して重要ではなかったことから、長らく歴史研究にとって取るに足らない対象であると見なされていた。特に戦後の西ドイツにおいては植民地の過去が長らく忘却の彼方にあったことは間違いない(Gesine Krüger, *Vergessene Kriege: Warum gingen die deutschen Kolonialkriege nicht in das historische Gedächtnis der Deutschen ein?*, in: N. Buschmann / D. Langewiesche (Hg.), *Der Krieg in den Gründungsmythen europäischer Nationen und der USA*, Frankfurt (Main) 2003, S. 120-137.)。しかし本研究課題代表者は、植民地主義とナチズムが少なくとも人的な連続性を持っていることに鑑み、ドイツ史における「植民地」のインパクトは、単に統治年数や経済的重要性といった問題にはとどまらないのではないかと考えた。そしてその考えは、博士論文でドイツの「熱帯医療」を扱った後で一層確たるものとなった。

2. 研究の目的

今日、それまで「一国史」の傾向が極めて強かったドイツ近代史の研究環境は一変し、グローバルな視点を取り入れた研究が増え始めた。そしてドイツ植民地史研究も質量ともに充実した(例えば S. Conrad / J. Osterhammel (Hg.), *Das Kaiserreich transnational: Deutschland in der Welt 1871-1914*, Göttingen 2004。日本では、浅田進史『ドイツ統治下の青島—経済的自由主義と植民地社会秩序』東京大学出版会、2011年)。植民地研究が進展するにつれて、その人種主義的な統治方法が問題とされるようになった。とりわけド

イツ領南西アフリカで発生した、いわゆる「ヘレロ・ナマ戦争」(1904-1908)では、統治に反対する現地住民に対する、ドイツ側の非人道的な扱いがクローズアップされ、歴史学のみならず文学や政治学などの分野からも関心を集めた。その議論の多くが、この戦争がいわゆる「ジェノサイド」に相当するのではないが、そしてそうだとすれば、ホロコーストにおいて頂点に達するナチの人種主義が、すでにその起源を植民地統治に持っていたのではないかという点をめぐって行なわれた(ユルゲン・ツィンメラ『ホロコーストと植民地主義—ジェノサイド思想の起源をめぐる考察』石田勇治・武内進一(編)『ジェノサイドと現代世界』勉誠出版、2011年、73-99頁。また副島美由紀『ドイツ植民地ジェノサイドとホロコーストの起源論争—ナミビアにおける「ヘレロ・ナマの蜂起」を巡って』『小樽商科大学人文研究』119号(2010年)、89-133頁)。研究代表者が修士論文で扱ったオイゲン・フィッシャーにも注目が集まっている。上述の「ヘレロ・ナマ」戦争の直後に南西アフリカに入り、「混血」住民の形質人類学調査を行なったフィッシャーは、人間遺伝にもメンデル法則が成立することを証明した(と少なくとも本人がそう考えていた)功績により、フライブルク大学解剖学教授(1918年)、ベルリン大学およびカイザー・ヴィルヘルム人類学・人間遺伝学・優生学研究所長(1927年)の地位にまで登りつめ(石田勇治『ナチ・ジェノサイドを支えた科学—優生学とエスノクラシー』石田・武内前掲書、101-117頁とくに108頁)ナチ時代においても形質人類学および人種衛生学の重鎮として大きな影響力を持っていた(Bernhard Gessler, Eugen Fischer: *Leben und Werk des Freiburger Anatomen, Anthropologen und Rassenhygienikers bis 1927*, Frankfurt (Main) 2000)。ある論者はフィッシャーの思想とヒトラーの世界観は、かなりの部分で共通部分があると主張(Gessler, Eugen Fischer, S. 139f.)するが、別の論者はフィッシャーの人種主義が20世紀初頭の欧米社会に根強くあった「黒人差別」の域を出ないもので、ナチ期の反ユダヤ主義とは性格が異なるとする(Birthe Kundrus, *Von Windhoek nach Nürnberg? Koloniale Mischehenverbote und die nationalsozialistische Gesetzgebung*, in: Kundrus (Hg.), *Phantasiereiche: Zur Kulturgeschichte des deutschen Kolonialismus*, Frankfurt (Main) 2003, S. 110-131, hier S. 120f.)。

本研究は、こうした一連の植民地主義とナチズムの「連続性」に関する議論を踏まえ、具体的な「個人」に焦点を当てながらこの問題を考えるものである。そ

ここでは伝記的な「個人史」と、彼らが生きた時代の「社会史」、さらには彼らが行なった研究の「学問史」が交差するような研究が目指される(時代やテーマが全く異なるが、こうした研究手法については以下から学ぶことが多かった。ナタリー・N・デーヴィス(長谷川まゆ帆ほか訳)『境界を生きた女たち』平凡社、2001年)。こうしたアプローチをとることで、従来の「連続性」に関する議論では見落とされがちだった、個人の主張や見解の時間的な変遷を追うことが可能である。フィッシャーに関していえば、「人種」をめぐる彼の主張は、「混血」研究を行なった1908年当時と、第一次大戦後では大きく異なっており、その意味で彼の研究ははじめからナチズムに絡め取られる運命にあったわけではない。彼の主張がナチズムのそれと一致するには、いくつかのプロセスが不可欠だったのである。同じことが他の3人にも当てはまるのではないか、だとすればそのプロセスを追うことが重要なのではないかというのが目下の仮説である。この仮説の検証には、それぞれの言説を時系列的に整理し、それに対する社会や学界の反応などもあわせて分析することが必要である。言説を、それが生み出される歴史社会的な文脈に絶えず位置づけることで(ということは、ワイマール期における彼らの活動にも注意を払うことで)、「連続性」論者がしばしば行なう、「コロニアリズム」と「ナチズム」の、ややもすると性急な比較は修正されるであろう。

なお、上記4人を研究対象として選んだ理由は、第一に(当然ながら)彼らが植民地を経験したこと(ローデンヴァルト(1878-1965)は植民地医師としてトーゴに、シリング(1871-1946)はローベルト・コッホ研究所熱帯医療部門の責任者として何度もドイツ領アフリカ植民地を訪問、クライネ(1869-1951)は「眠り病」対策委員長として東アフリカに滞在)。そして第二に、そうした植民地での研究成果が評価され、ナチ期にそれぞれ責任ある地位にあったこと(ローデンヴァルトはハイデルベルク大の衛生学教授、シリングはグッハウ強制収容所のマラリア人体実験における責任者、クライネはコッホ研究所所長)。そして第三には彼らが皆、第二次大戦後も存命で戦前の自らの「負の遺産」と(多かれ少なかれ)対峙しなくてはならなかったこと(フィッシャーは「ナチ・シンパ」として連合軍から禁固刑と罰金刑を科せられ、ローデンヴァルトはハイデルベルク大の教授職を追われ、シリングは人体実験の責任者として絞首刑に処せられ、クライネはドイツを追われるように南アフリカへ移住した)である。

3. 研究の方法

上記の研究目的達成のため、第二帝政期、ワイマール期、ナチ期における熱帯医療や形質人類学の学術雑誌、研究対象の4名の学術論文や著書(回想録を含む)彼らの所属していた研究機関の公文書、植民地行政および医療保険行政を担当する省庁の公文書の収集と内容分析を行なう。こうした文書の大半がドイツ連邦共和国にある各文書館および図書館に所蔵されているため、史料の収集は主にドイツ国内で行なう。

上記史料 に関しては、形質人類学の学術雑誌である『形態学・人類学雑誌』、人種衛生学の雑誌『人種社会生物学アルヒーフ』、医学全般を扱った『週刊ドイツ医学新聞(Deutsche Medizinische Wochenschrift)』、そして熱帯医療に重点を置く『船舶・熱帯衛生アルヒーフ(Archiv für Schiffs- und Tropenhygiene)』などがあり、研究対象となる4名もこの雑誌のいずれかに論文を多数寄稿している(W. U. Eckert, Medizin und Kolonialimperialismus: Deutschland 1884-1945, Paderborn 1997. H. Isobe, Medizin und Kolonialgesellschaft: Die Bekämpfung der Schlafkrankheit in den deutschen "Schutzgebieten" vor dem Ersten Weltkrieg, Berlin 2009. P. Grosse, Kolonialismus, Eugenik und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland 1850-1918, Frankfurt (Main) 2000. 等々の巻末にある文献一覧を参照)。これらは一括してベルリン国立図書館に所蔵されている。についてはベルリン連邦文書館に「帝国植民地省」および「帝国保健省」のコレクションがあり、上記4人の植民地からの報告や専門家としての鑑定書などが収録されている。またドイツ最大の植民地圧力団体である「ドイツ植民地協会」の発行する『ドイツ植民地新聞(Deutsche Kolonialzeitung)』も、現地で起きた様々な問題を伝えており大変有用である。これもベルリン国立図書館に所蔵されている。

4. 研究成果

研究図書 of 刊行、研究論文の発表、学会での報告

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)
(論文) Hiroyuki Isobe, Eine rationale Kolonialpolitik? Die Bekämpfung der Schlafkrankheit im deutschen Schutzgebiet Ostafrika vor dem Ersten Weltkrieg, in:

Roman Loimeier (Hg.), *Seuchen im subsaharischen Afrika* (Periplus: Jahrbuch für außereuropäische Geschichte, 21. Jg.), Berlin 2011, S. 115-132.

(論文)磯部裕幸「『マージナル・コロニアリズム』から『マダガスカル計画』へドイツにおける植民地の記憶(1884-1945)」(『現代史研究』56(2010年) 19-34頁)

(論文)磯部裕幸「『変化するもの』をめぐる葛藤—(西)ドイツにおける、フランス『アナル派歴史学』の受容についての考察」(『秀明大学紀要』第11号(2014年3月) 1-22頁)

〔学会発表〕(計 5 件)

Hiroyuki Isobe, „Weltgeschichte à la japonaise? Die globalhistorischen Forschungen in Japan“ (『日本流世界史?—日本におけるグローバル・ヒストリー研究』コンスタンツ大学歴史・社会学部シンポジウム『世界史教育のあり方』、2011年2月)

Hiroyuki Isobe, „Medizin und Kolonialgesellschaft: Die Schlafkrankheitsbekämpfung in den deutschen Schutzgebieten vor dem Ersten Weltkrieg“ (『医学と植民地社会—第一次大戦前のドイツ『保護領』における眠り病対策』デュッセルドルフ大学医学部医学史科公開講演、2010年11月)

磯部裕幸「書評：浅田進史著『ドイツ統治下の青島—経済的自由主義と植民地社会秩序』(東京大学出版会 2011年)」(ドイツ資本主義研究会 2011年12月例会(於 専修大学神田校舎)(使用言語：日本語))

磯部裕幸「医学と植民地社会—ドイツ領植民地における『眠り病』対策」(研究会「歴史と人間」報告(2012年5月)(於一橋大学)(使用言語：日本語))

磯部裕幸「帝国と形質人類学—オイゲン・フィッシャーとドイツ第二帝政の『危機』」(『現代史研究会』報告(2012年5月)於明治大学駿河台校舎)(使用言語：日本語))

〔図書〕(計 2 件)

(著書) Hiroyuki Isobe, *Medizin und Kolonialgesellschaft: Die Bekämpfung der Schlafkrankheit in den deutschen Schutzgebieten vor dem Ersten Weltkrieg*, Berlin: LIT-Verlag 2009.

(著書—分担執筆)磯部裕幸「植民地支配の記憶—想起と抑圧そして忘却」石田勇治・川喜田敦子(編)『想起の文化—過去と向き合う現代ドイツの政治と社会』(東京大学 DESK 『現代ドイツへの新たな視座』第3巻、勉誠出版、近日刊行予定・原稿受領・最終校正済)

〔産業財産権〕
○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
磯部 裕幸 (39)
研究者番号：10637317

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：